

優秀賞

大切なものを守るために

大阪府 大阪府立咲くやこの花中学校 三年生

山岸 心

これは私がおばあちゃんから聞いた「じいじ」の話だ。

私の祖父は会社を経営し、睡眠時間が毎日五時間を切るほど多忙な日々を送っていた。会社のために懸命に働く祖父だったが、「孫のためなら。」と言い、どんなに忙しくても私と遊ぶ時間を大切にしていた。家族の前ではいつも明るい笑顔を絶やさず、その裏に隠された苦しみを誰も知らなかった。

祖父は実はガンを患っていた。最初に肺ガンを発見され、その後の検査で原発不明の末期ガンと診断された。そこから過酷な闘病生活が始まった。入院した祖父を優しく支えた祖母。しかし、会社の経営は大きな打撃を受けた。社長である祖父の不在は収入の激減を招き、混乱が続いた。

そんな中、長男である父が会社を引き継ぎ姉たちも懸命に働きながら家族を支えた。祖父が生きていることが、家族にとって何よりの希望だった。しかし、ガンは容赦なく、祖父の闘病生活は悲しい結末を迎えた。

祖母は深い悲しみの中で、葬儀の手続きや役所の届け出など膨大な事務作業を一人でこなさねばならなかった。精神的にも経済的にも大きな負担がのしかかった。

そんな中、おばあちゃんに一本の電話がかかってきた。受話器の向こうから落ち着いた声で

「山岸さんのお電話でお間違いないでしょうか。」

と聞こえた。それは、保険会社からの連絡だった。おばあちゃんは戸惑いながらも応じた。すると担当者は

「色々とお疲れでしょうが、明日少しお時間をいただけないでしょうか。」

と優しく告げた。おばあちゃんは以前から面識があったわけではなかったが、祖父から何かあればこの人に頼るようにと言われていたのだという。

翌日、指定された場所で担当者と会った。机には、書類が丁寧に並べられ、担当者はゆっくりと説明を始めた。死亡保険金は家族が亡くなった際に受け取れる保険金だと聞いた。

「これは私たちには計り知れない悲しみを背負った遺族の方々を少しでも支えるためのものです。どうか、何かに頼ってください。」

その言葉は、全部を一人で抱え込もうとしていたおばあちゃんの心を静かに溶かした。

第63回中学生作文コンクール

保険金はやがて私たち遺族の生活の支えとなった。生活費や会社の維持費、葬儀でさんだ支払いにも充てられた。おばあちゃんは

「これがあったから、また前を向けた。」

と今でも話す。お金だけでなく「一人じゃない」という安心感も与えてくれたのだ。

今ではおばあちゃんは、朝に庭の花へ水をやり、近所の人と笑顔で挨拶を交わすようになった。時には家族そろって食卓を囲み、「じいじ」の思い出話で笑い合うこともある。もちろん寂しさは消えないが、それでも穏やかな時間を過ごせるようになったのは、あの時、保険金という命綱があったからだとも思う。

私は病気にならず、家族と元気に過ごすことが一番の幸せだと思う。しかし命には期限があり、それは誰にも分からない。だからこそ、もしもの時のために備えることが大切なのだろう。

生命保険は、もしもの時に家族を守り、これからの暮らしを支える命綱のような存在だ。そのおかげで私たちは安心して日々を過ごし、未来へ歩んでいけると心から感じている。